続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第１回

白糠町には古くからアイヌの人たちが住み、豊かな自然やその恵みとともに独自の文化を育んできました。その中で最も身近なものが、普段私たちが使っている地名で、町内の地名の多くはアイヌ語に由来しています。

今回からは、「海岸筋」「茶路川筋」に続き、北海道横断自動車道（道東道）庶路インターチェンジの開通を記念して、「庶路川筋」のアイヌ語地名について、地名の由来やアイヌ文化に関する話題など、庶路川をさかのぼりながら紹介します。

○フラサカオマナイ

「フラサカオマナイ」について、白糠地名研究会は「フラル（もや、霧）・サㇰパ（夏）・オマ（入る、ある）・ナィ（沢）」という意味から、「夏になるともやや霧が立ち込める沢」と訳しています。

また、「フラ」には「匂い、臭い」と言う意味もあることから、夏にこの土地で咲くクロユリ、アヤメ、エゾカンゾウなどの花の匂いから付いたのかもしれないとしています。この意味での訳は「夏になると花の匂いが立ち込める沢」となり、匂いが立ち込めるくらい花が咲き誇る様子が目に浮かびます。いずれにしても、これから夏にかけての風景を地名にしたものです。

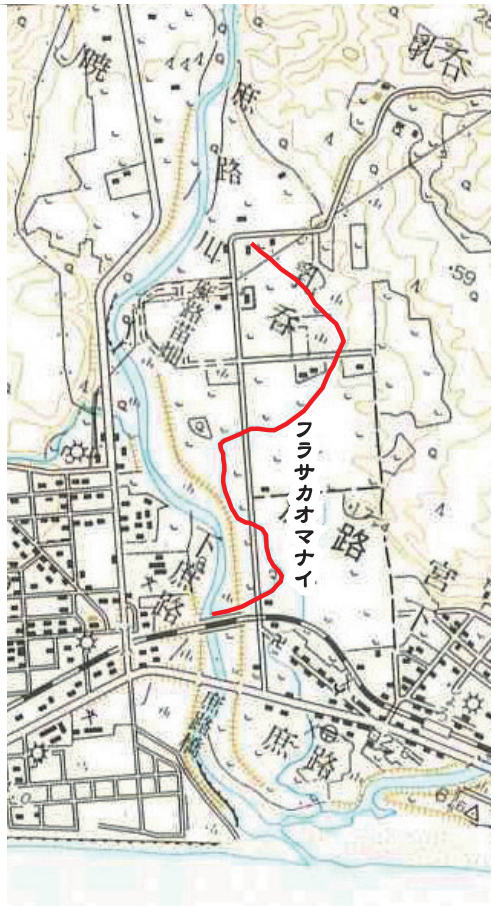
この地名は、現在、庶路共同墓地の南側の原野を指しますが、「ナィ」というアイヌ語から、乳呑を出てＪＲ根室本線の橋近くで庶路川に注いでいる小川に由来していると思われます。

ちなみに、「フラ」が付く地名には「富良野」があります。川の名前がもとになっていて「フラ（臭い）・ヌ（持つ）・イ（もの）」と言う意味です。水源が十勝岳のため、水に硫黄の臭いが含まれていることから、そう呼ばれたと考えられています。（参考／富良野市公式ホームページ）

■庶路川筋のアイヌ語地名

『庶路川筋のアイヌ語地名』では、24カ所を今月号から順に紹介する予定です。（隔月掲載）

①フラサカオマナイ
②マサルカオマプ
③チプタナイ
④チノミ（乳呑）
⑤トーパラペツ
⑥エルモクンナイ
⑦オタクシュペウシナイ
⑧ケトンチコタン
⑨オレウケナイ
⑩シリクロチ
⑪タンネナイ
⑫オニヨップ
⑬クッショナイ
⑭ウカルキナイ
⑮オンタシナイ
⑯ルーオンネナイ
⑰クオマナイ川
⑱パナアンソーポコマナイ
⑲ペナアンソーポコマナイ
⑳ションピナイ
㉑タッタマップ
㉒シケレペ川
㉓コイカタショロ川
㉔カカンナイ



続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第２回

○マサルカオマプ

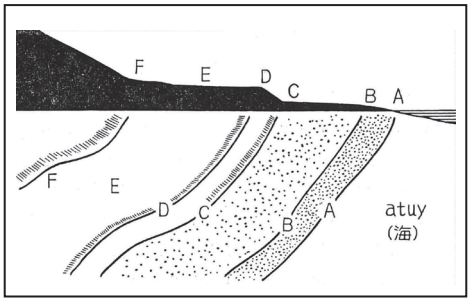
「マサルカオマプ」は、「マサル（草原）・カ（上）・オマ（入る）・プ（ところ）」という意味で、草原への入り口のことを表しています。

「マサル」は、海辺の砂浜より一段高くなっている草原のことで、白糠地名研究会は、マサルカオマプの「マサル」を釧白工業団地北側にある高台「庶路マサルカ（字名）」として、「航空写真で確認すると、砂丘の上にひらけたマクンマサル（奥の草原）の様相をはっきりとみてとることができる」と説明しています。

また、白糠市街地のＪＲ線南側も、かつては「マサルカ」という字名で呼ばれていました。消防署の前の通りから見ると、国道38号が一段高くなっていることで、その由来がわかります。

■アドイからマクンマサルまで

言語学者の知里真志保博士は、「アドイ（海）」から「マクンマサル」までを次の図で説明しています。



『知里真志保著作集３　生活誌・民族学編』「地名アイヌ語小辞典」から

A～B／ペトタ（濡れた砂原・波打ち際）
B～C／サトタ（乾いた砂原）
C／フンキポク（砂丘の下）
C～D／フンキコトル（砂丘の斜面・砂丘の途中）
D／フンキカ（砂丘の上）
D～E／サンケマサル（浜手の草原）
E～F／マクンマサル（山寄りの草原・奥の草原）

このことから、庶路の「マクンマサル」に対して、白糠市街地のマサルカは「サンケマサル」ということができます。

○チプタナイ

「チプタナイ」は、かつて白糠最大の炭鉱だった明治鉱業の庶路炭鉱があったところです。

「チプ（舟・丸木舟）・タ（つくる）・ナィ（沢）」という意味から、舟をつくる材料となる木が茂っている沢のことをいい、この沢で舟を作ったことから、その名が付きました。丸木舟は、アイヌの人たちの生活に欠かせないもので、河川や沼で衣食住に必要な原材料をとり、運ぶために使われました。

現在、東側の高台では、平成30年４月の開校を目指して「庶路小学校・中学校」の新しい校舎の建設が進められています。「チプ」はもともと「チ（われら）・オ（乗る）・プ（もの）」という意味ですので、チプタナイでは、今まさに子どもたちの「われら乗るもの」がつくられています。

■一世紀ぶりの進水式

ウレシパチセには、１９８７年（昭和62年）に作られた丸木舟があります。

長さ５・４メートル、最大幅85センチ、重さ１１０キロで、樹齢およそ２００年、直径１メートルのカツラの木から約４カ月かけて作られました。

カツラの木は、アイヌ語で「ランコ」と言い、丸木舟のほかにも、臼や杵、小刀の柄など、さまざまな木製品の材料として使われたほか、皮の煮汁は染料になったということです。

丸木舟を作る作業は、６月に安全を神に祈って始まり、10月、パシクル沼で、白糠では１００年ぶりとなる進水式の儀式「アシリチプ　サンケ（新しい・舟・出す）」が行われました。



丸木舟進水式の様子

続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第３回

○チノミ

「チノミ」は、「チ（我ら、私たち）・ノミ（祭る、祈る）」という意味で「祭場」のことを表し、庶路共同墓地周辺から北側の原野を指します。

明治時代のアイヌ研究者永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』（永田地名解）で「チノミ　祭場　熊ヲ供へ神ヲ祭ル處」と、ここでイヨマンテ（クマの霊送り）が行われたことを記しています。

また、チャシ跡と集落跡を示す壕や竪穴住居跡が確認されていて、エムシ（刀）とエムシアツ（刀吊り）が見つかっています。

■熊ヲ供へ神ヲ祭ル處

イヨマンテは、「動物の魂をカムイモシリ（神の世界）へ送る」という意味ですが、一般的には「クマの霊送り」として知られています。

クマは神が姿を変えて毛皮と肉を土産に人間世界を訪れたもので、クマを射止めたときは、儀礼をして神の世界に送り帰しますが、子グマは生け捕りにし、１年から２年育てた後、送別の宴を開き、たくさんの土産を持たせて親の神へ送り帰します。こうすることで、人間世界がいいところであることを神々に伝え、再び人間世界を訪れてもらうことを願いました。

このように、アイヌの人たちは、イヨマンテを村をあげて行い、獲物を安定して獲ることができるよう祈願しました。

また、日常使っている器具や道具、祭具なども、神々が化身して人間世界で役立っていると考え、それらが古くなったり破損して使えなくなると、イヨマンテと同じように霊送りの儀礼をして、送り場と呼ぶ場所に運びました。

これらのことから、「チノミ」は、『永田地名解』の記載や遺跡から見つかったエムシとエムシアツによって、コタン共同の「祭場」として特別で重要な場所であったことがわかります。

【参考／『アイヌの歴史と文化Ⅱ』アイヌの送り儀礼（秋野茂樹）、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構ホームページ『アイヌ生活文化再現マニュアル』イオマンテ】



エムシ（左）とエムシアツ（右）

○トーパラペツ（泊別）

「トーパラペツ」は、泊別川のことで「ト（沼）・パラ（広い）・ペッ（川）」という意味があり、沼のように広い川が流れていたところからこの名がついたと考えられています。

白糠地名研究会は、「トーパラ」の解釈について、「町営牧場がある泊別一帯は、もともとひどい湿地であった」「古老の話によるとむかし川ぶちには木が茂り、かなり水量があった」ということから「沼のように広い」と訳しています。また、『永田地名解』には「廣川」とのみ記載されています。

○エルモクンナイ

「エルモクンナイ」は、泊別川の少し北で西側から庶路川に注いでいる川です。「エルム（ネズミ）・クンネ（黒い）・ナイ（沢）」という意味から「ネズミがいっぱいいた沢」と訳されますが、実際にネズミが多かったかはわかりません。

アイヌ語地名研究者の山田秀三は、「襟裳（岬）」について「エンルム（岬）と呼ばれた音から出たもののようである」としたうえで、「エルム（鼠）と音が近いので、諸地のエンルムは鼠とも理解され、鼠伝説が残されている処が多い。今でも（襟裳）岬の先の海中の岩をネズミになぞらえている」と述べています。

【参考／『北海道の地名』（山田秀三）、『萱野茂のアイヌ語辞典』（萱野茂）

続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第４回

○オタクシュペウシナイ

「オタクシュペウシナイ」は、中庶路日の出地区の南で西側から庶路川に流れ込んでいる川の名前です。「オ（川尻）・タク（玉石）・スプ（激流）・ウシ（ある）・ナィ（沢）」という意味があり、「川尻に玉石があって流れが速い沢」と訳されています。

道東地区で営林署勤務経験を持つ加藤正信氏は、著書の『道東地方のアイヌ語地名』で、この川の記事に営林署図にある名前として「イランクミルエナイ」を載せ、二つの名前があることを記しています。白糠地名研究会も「イランクミルエナイ」を営林署図の地名として紹介していて、その説明をもとに地図を見ると、加藤氏が記したように「オタクシュペウシナイ」であることがわかります。

■イランクミルエナイ

「イランクミルエナイ」は、「イ（クマ）・ル（道）・アン（ある）・ク（弓）・ミレ（身につける）・ナィ（沢）」という意味で「クマの出る道で弓を身につけてとおる沢」と訳されます。

クマの道について、根本與三郎氏は「クマは、ルーチシ（峠道、山越え、山越えの近道）と言って、近道をする場所があり、その付近には案内標のように、樹皮に爪で印をつけてある。それを実際に自分の目で見たら、積雪の上に立って印をつけてあった。そして、その地点からそれ程行かない所で、クマが何頭も川を渡っていたのを見た。」という話を遺しています。

【参考／『アイヌ民族技術調査１〈狩猟技術〉』北海道教育委員会、２００９年】

○ケトンチコタン

「ケトンチコタン」は、「ケトンチ（皮張枠）・コタン（村）」という意味で、「クマやシカなどの獣皮を木枠に張ってかわかしている村」と訳され、旧本岐炭鉱付近のケトンチ川東側にあったと考えられています。ケトンチ川は、旧本岐炭鉱の南側を西から流れ、南東へ向きを変えてオタクシュペウシナイに合流する川です。

■ケトンチ「皮張枠」

「ケトンチ」の「皮張枠」という訳は、言語学者の知里真志保博士によるもので、ケト（皮張棒）を組み合わせた枠のことを言い、「ケトウンチセ（皮張棒・ついている・家）」の「セ」が略されてこの形になったとのことです。そして「生皮を張った枠を両方から屋根のように寄せかけてその下で火を焚いて乾すようにしたもの」と説明しています。

クマやシカなどの動物は大切な食糧で、皮は、木綿が手に入るまで、植物の繊維とともに、古くから衣服（獣皮衣）や靴などの素材に用いられていたことがわかっています。また、和人との交易品として、熊の胆や鹿角、干し鮭、昆布と同じくたいへん貴重なものでもありました。

【参考／『知里真志保著作集３生活誌・民族学偏「地名アイヌ語小辞典」、『アイヌの歴史と文化Ⅱ』「アイヌの衣服」児玉マリ】



続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第５回

○オレウケナイ

「オレウケナイ」は、中庶路地区で庶路川から東へ分かれて北上する川の名前で、「オ（川尻）・レウケ（曲がっている）・ナィ（川）」という意味があります。

この地名は、「ヤリキレナイ」（由仁町）、「アイノナイ」（北見市）などともに珍地名として取り上げられ、何度か取材を受けたことがあります。関西のラジオ局からは、白糠のアイヌ文化を含めて番組で紹介したいとの依頼があり、白糠アイヌ文化保存会の磯部会長に電話出演をお願いしたこともありました。

○シリクロチ

「シリクロチ」は、新興地区で庶路川から西の方向へ向かっている川です。その訳について、白糠地名研究会は「シリ（山）・クル（近く）・チ（ずっと）」という意味から、「山に近くずっと流れている川」としています。また、永田方正は『北海道蝦夷語地名解』で「山陰」と訳していて、これは「クル」の意味を「影、陰」と解釈したことによるものです。

○タンネナイ

「タンネナイ」は、３月12日に開通１周年を迎える道東自動車道庶路インターチェンジから、約１・５キロメートルほど北で、庶路川から西に分かれ南へと向かう川です。「タンネ（長い）・ナィ（沢）」という意味があります。

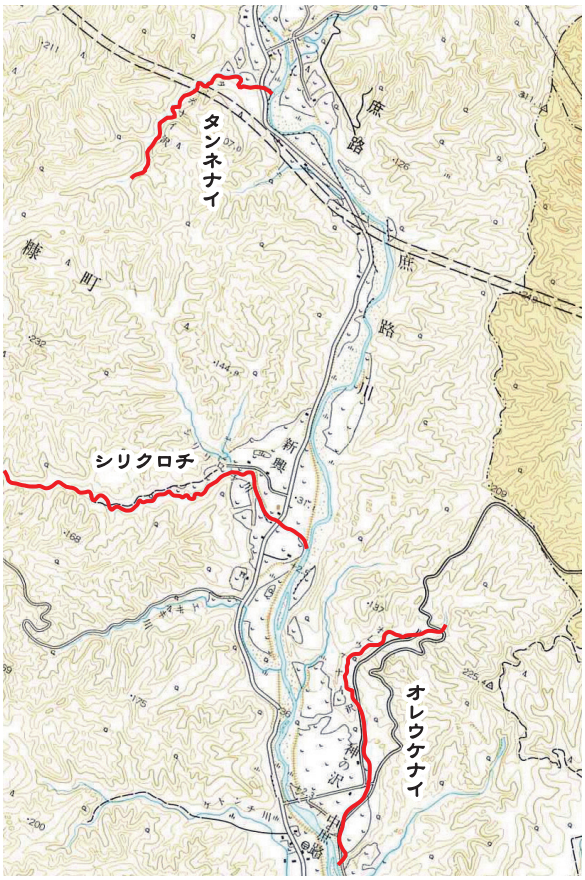
■川は海から発して山へ行く者

言語学者の知里真志保博士は、『アイヌ語入門～とくに地名研究者のために』という著書で、川に対する古いアイヌの考え方を紹介しています。

博士は、「われわれの考えからすれば、川は山に発して海へ入るものであるが、アイヌの古い考え方に従えば、それとは全く反対に、川は海から発して山へ行く者なのである」と述べ、「アイヌはもともと海岸線に沿うて、川のそばに点々と部落をつくっていた。そして、内陸の交通は主として川によったのである。部落の近くを流れている川をさかのぼって、サケやマスの類をとったり、クマやシカをとったりして暮らしていたところから、そういう生活に即して、川は海からさかのぼって山へ行くもの、という考えが自然に生まれてきたのであろう」と説いています。

「チャロ（川口）」が内陸への入り口を表すこと、「庶路」が「ソ・オロ・ル（滝へ向かっている道）」を意味することからも、この考えが地名の中に生きていることがわかります。

【引用／『知里真志保著作集４』アイヌ語研究編「アイヌ語入門～とくに地名研究者のために」】



続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第６回

○オニヨップ（川）

「オニヨップ」は、上庶路中央で庶路川から東に分かれて北上する川の名前で、この川に沿って阿寒町につながる町道上庶路阿寒線が通っています。

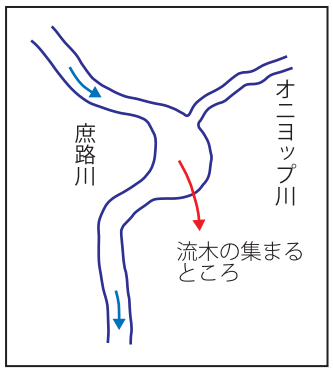
その意味について、白糠地名研究会は「オ（川尻）・ニ（木）・オ（集まる）・プ（ところ）」としていますが、旧『白糠町史』の「アイヌ語地名解」では「川尻に樹木の多い川」、『北海道蝦夷語地名解』（永田方正著）は「樹木多キ川尻」と訳しています。

「川尻に樹木の多い川」「樹木多キ川尻」という訳は、木がごちゃごちゃある様子から「多い」という言い方になったと考えられますが、道東地方のアイヌ語地名を現地調査した鎌田正信の「川尻のすぐ下手で本流（庶路川）は大きくふくらみ、カーブをえがき流れている。そのふくらみにいつも流木がたまっていたのであった」という説明からも「木が集まる川尻」と訳す方が分かりやすいかもしれません。

■ごちゃごちゃある様子

白糠地名研究会が「集まる」と訳している「オ」について、言語学者の知里真志保博士は、地名に出てくる「オ」は、古くは「ごちゃごちゃある」「うようよいる」という意味だったと述べています。

オニヨップの見取図



参考／道東地方のアイヌ語地名

○クッショナイ（クショナイ川）

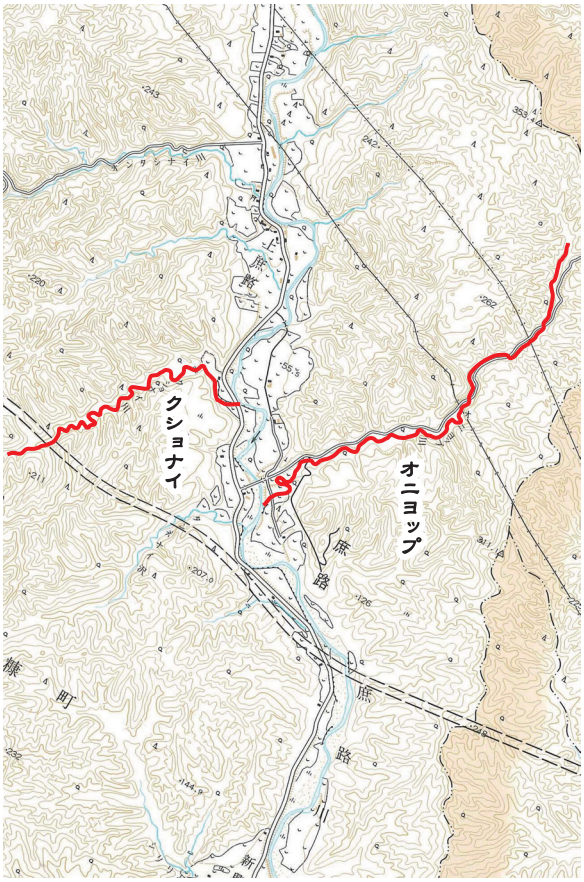
「クッショナイ」は、オニヨップ川から庶路川を1・5キロメートルほど上ったところで西に分かれている川です。「クッ（崖）・ソ（滝）・ナィ（沢）」という意味があり、川に面した崖に滝があることを表しています。

■崖を表す「クッ」と「ピラ」

崖を表すアイヌ語として、クッショナイの「クッ」と茶路川筋にあるアツタピラ（オヒョウが生えている崖）、ピラウンナイ（崖が川にそって続いている）の「ピラ」があり、知里博士は「クッ」を「岩層のあらわれている崖。帯状に岩のあらわれている崖」、「ピラ」を「土がくずれて地肌のあらわれている崖」と説明しています。

地名研究者の山田秀三は、鶴居村と標茶町の境を流れる「久著呂川」に関して、サコロペ伝承者であった八重九郎氏の「クチョロ川の奥のシクチョロに崖があって巨鳥が棲んでいて、クッコロカムイ（崖の神）と呼ばれていた。クチョロはそれから出た名である」という話を紹介しています。

【参考・引用／『知里真志保著作集４』「地名アイヌ語小辞典」・『道東地方のアイヌ語地名』鎌田正信著・『北海道の地名』山田秀三著】



続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第７回

○ウカルキナイ（川）

「ウカルキナイ」は、上庶路地区で庶路川が大きくカーブしているところから北東方向へ向かっている川の名前です。

「ウカラ（ウカラという遊び）・キ（…をする）・ナィ（沢）」という意味で、「こん棒で打ち合う遊びをする沢」のことを言います。永田方正は『北海道蝦夷語地名解』で「遊戯澤」と訳しています。

■ウカラという遊び

「ウカラ」について、知里真志保博士は「ウ（お互い）・カラ（打つ）」という意味で、「お互いが打つ」「打ち合う」ことであると述べています。その「打ち合い」は、①紛争が口論（チャランケ）で解決しない場合の手段、②うっぷんがあったときの和解の手段、③何かを決定するときの方法（試合・武技競べ）で、それが後にスポーツのような遊びになり、興行的な行事にまでなったと説明しています。そして、そのときの道具となったこん棒は、本来は狩猟具で、サケの頭をたたく棒が代表例です。

【参考／『知里真志保著作集１』「樺太アイヌの説話（一）」知里真志保著】

○オンタシナイ（川）

「オンタシナイ」は、宮崎神社のあたりで庶路川から西に分かれ、縫別に通じる町道上庶路本流線に沿って流れている川です。

「オ（川尻）・ム（ふさがっている）・タッ（カバノキ）・ナィ（沢）」という意味があります。

カバノキは、アイヌの人たちにとって使い道の多い木でした。皮は各種の容器をつくる材料になったほか、ダケカンバは、樹皮の薄皮を傷口に貼って包帯のように使い、シラカンバは、樹液を飲んだり、砂糖の代用にしたり、発酵させて酒造りにも使われていました。

【参考／『アイヌ民族の有用植物～薬用・植物編』北海道立衛生研究所ほか】

○ルーオンネナイ（川）

「ルーオンネナイ」は、町道上庶路本流線が道道２４２号に突き当たったところの先で庶路川から北東へのびている川です。

「ル（道）・オンネ（大きい）・ナィ（沢）」という意味があり、川に沿って道があったことを示しています。

鎌田正信は『道東地方のアイヌ語地名』で「この沢沿いの路は裏側の阿寒町知茶布川に通じていたことが窺われる」としています。

知茶布川は舌辛川の支流であることから、この地名の「ル（道）」は、小助川濱雄が記した「白糠村字庶路より入り、舌辛太、阿寒湖西岸を経て釧路、北見国境の山脈を越え、網走川に沿いて下り、新栗履（現大空町）に出づ」という「網走越（網走山道）」のもとになったアイヌの人たちの踏み分け道と思われます。

【引用／『釧路国蝦夷時代史』小助川濱雄】



続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第８回

○クオマナイ（川）

「クオマナイ」は、住良地区の南で庶路川から西へ向かっている川の名前です。「ク（弓）・オマ（ある）・ナィ（沢）」という意味から「仕掛け弓がある沢」と訳しています。

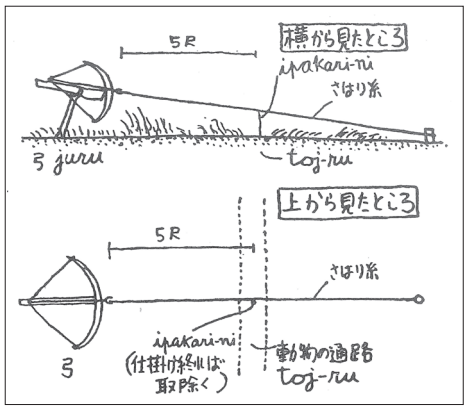
ク（弓）には「手に持つ弓」と「仕掛け弓」があり、地名のクは置く弓ということで、ほとんどの場合「仕掛け弓」を意味します。動物を捕獲するわなの一種で「アマッポ」と呼ばれます。

【参考／『知里真志保著作集３』「地名アイヌ語小辞典」】

■アマッポ

「アマッポ」は「アマ（設置して）・アク（射る）・ポ（小さいの）」という意味から「小型の仕掛け弓」のことを言いますが、普通は仕掛け弓の総称として使われているようです。

その仕組みについて知里真志保博士は、動物の通り道から５尺（約１・５メートル）ほどのところに弓を置き、矢を道に向ける。弓からさわり糸を道に直角に交差させ、道の向こう側の木杭に結びつけておく。動物がこの道を進んで糸に触れると同時に矢が自動的に発射し、動物に刺さると説明しています。



▶仕掛け弓の配置

明治期以降、銃が普及すると、この仕組みを使った「仕掛け銃」も使われました。

本町のアイヌ文化伝承者として、伝統的な狩猟や漁労に精通していた故根本與三郎氏は、「一番先に捕獲したヒグマを見たのは、俺が小学校を卒業した14歳の10月の時で、その年の春に生まれた仔馬がヒグマに取られたのを、アマッポの鉄砲で捕獲した時のことであった」と、銃によるアマッポについて北海道教育委員会の調査で詳しく述べています。

【参考・引用／平成20年度アイヌ民俗文化財調査報告書『アイヌ民俗技術調査１〈狩猟技術〉』北海道教育委員会・『知里真志保著作集３』「樺太アイヌの生活」】



○パナアンソーポコマナイ
○ペナアンソーポコマナイ

「パナアンソーポコマナイ」は、住良地区にある下の橋付近で庶路川から西へ分かれている川で、その分岐点から２・５キロメートルほどさかのぼったところで東に向かっている川が「ペナアンソーポコマナイ」です。

「ソーポコマナイ」は「ソ（滝）・ポク（下）・オマ（そこにある）・ナィ（沢）」という意味で「滝の下にある川」と訳します。そして「パナ（川下側）・アン（ある）」、「ペナ（川上側）・アン」という対の表現によって、二つの川の位置を示したと考えられます。

続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第９回

○ションピナイ

「庶路」が「ソ・オロ・ル（滝に向かっている道）」であるとおり、庶路川は30キロメートルほどさかのぼると「大滝」と呼ばれる滝になっています。そして、その少し手前には、切り立った崖から流れ落ちる「不動滝」があります。

「ションピナイ」は、「大滝」や「不動滝」がある沢のことで「ソ（滝）・ウン（…にある）・ピ（細い）・ナィ（沢）」という意味から「滝のある細く深い谷川」と訳しています。

■「大滝」と「不動滝」

「大滝」は、松浦武四郎が著した『東蝦夷日誌』に「ホロソウ大瀧、此瀧幅二丈、高五六丈も有、水勢筆に盡し難し」とあるとおり、アイヌ語の「ポロソ（大きい・滝）」の和訳であることがわかります。

一方「不動滝」の由来には、次のような話があります。

明治44年（１９１１年）、大滝の上流に21戸が入植し居を構えました（滝ノ上集落）。集落の長が石に不動明王を彫刻して大滝に面した場所に安置すると、大滝は「不動滝」と呼ばれるようになり、現在の不動滝は「仙遊滝」と呼ばれました。

ある年、大水で不動明王が流されたとき、それを拾い上げた集落の長は仙遊滝の下に安置したので、それ以降仙遊滝が「不動滝」と呼ばれるようになり、現在の名前になったということです。

【参考／『白糠の文化財』第一集「庶路の滝…不動の滝と大滝」・『蝦夷日誌』上「東蝦夷日誌」】

○タッタマップ

「タッタマップ」は、庶路ダム湖に南西から流れ込んでいる川です。「タッ（カバの皮）・タ（切る）・オマ（そこにある）・プ（ところ）」という意味で、カバノキの樹皮をはぎとる場所を示しています。

北海道に自生するカバノキは、シラカンバ、ダケカンバ、ウダイカンバがよく知られていて、かつてアイヌの人たちはその樹皮を松明（たいまつ）などの灯火用に用いました。

■松明を使ったサケ漁

知里真志保博士は、アイヌの人たちが行っていた松明を使ったサケ漁について、次のように紹介しています。

カバノキの皮を短冊形に切って5、6枚重ねて縛った「スネ」に火をつけ、1人がそれで水面を照らし、その左右にヤスまたはマレク（回転銛）を持った人がいて、水中に動くサケを突き上げるのである。

スネを持つ人によって、サケが多く寄って来たり、少しも姿を見せなかったりする。気性の荒い人が持つと、サケはきわめて活発に動いて突きにくい。気性の穏やかな人が持つと、サケの動作が急にのろのろと鈍くなる。そういう人を「チェプ・コ・モイレ・プ（魚が・その人に対して・のろくなる・者）」と称する。概して男よりも女や子供の方がチェプコモイレプである。

【参考・引用／『知里真志保著作集3』「アイヌの鮭漁」】



続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第10回

○シケレペ川

「シケレペ川」は、庶路ダム湖の東側から北へ向かっている川です。「シケレペ（キハダの実）・ペッ（川）」という意味で、白糠地名研究会は「キハダの木が生えている川」と訳しています。

キハダの木は、普通「シケレペニ（シケレペのなる木）」と言いますが、地名研究会はその場所のようすとしてシケレペを「キハダの木」と解釈したようです。



■食べ過ぎ、打ち身に効能あり

キハダは、ミカン科に属する落葉樹で、北海道や東北地方では「シコロ」と呼ばれます。黄色い内皮は生薬「オウバク」として食中毒や食べ過ぎ、打ち身やねんざなどの治療に用いられます。

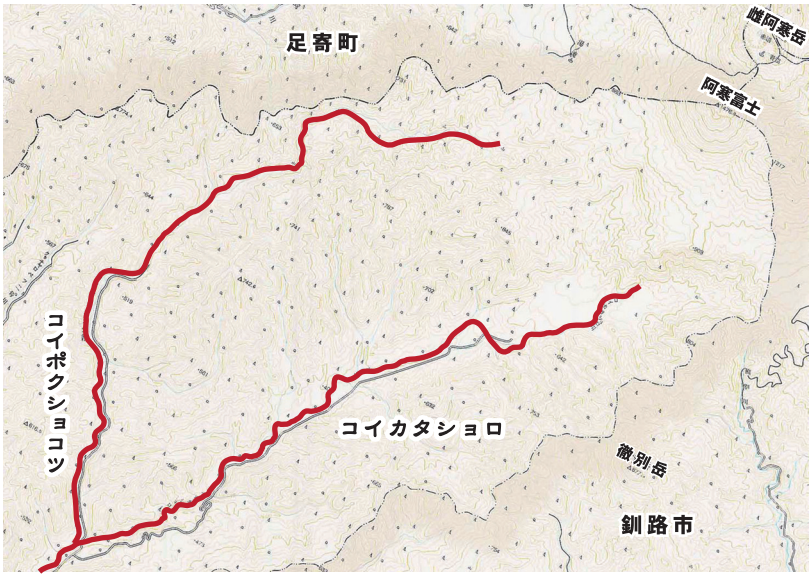
故根本與三郎氏は「シコロの実には甘いのと苦いのがある。甘いのをとってきて干して保存しておく。お茶にしても飲めるし、カゼや胃の具合が悪いのに効く。シコロの木の皮は、打ち身やねんざの患部に貼るとなおる。カゼをひいて唇が渇くとき、内皮のぬるぬるした黄色い部分を布につけて貼るとなおる。」と述べています。

【参考・引用／『アイヌ民族の有用植物　薬用・食用編』・『シラリカコタン』】

○コイカタショロ川・コイポクショコツ川

庶路ダム湖を出た庶路川は、クッチャロベツ川と分岐して北上し二つの川に分かれます。

右方向の「コイカタショロ川」は「コィカ（東方）・タ（ある）・ショロ（庶路）川」で、東方の庶路川であることを示し、左の「コイポクショコツ川」は「コィポク（西方）・ソ（滝）・コッ（くぼみ）」から「西の滝つぼのある川（庶路川）」と訳しますが、永田方正は『北海道蝦夷語地名解』で「コッ」を「谷」と解釈し、二つの庶路川を「東ノ瀧川」「西ノ瀧谷」と訳しています。



また、探検家の松浦武四郎は「コエホクシヨロ、此方西に入メアカン岳の下に到る、コイカタシヨロ、雌岳（雌阿寒岳）南の方に入る」と、どちらも雌阿寒岳に通じていることを『東蝦夷日誌』に記しています。

ちなみに、松浦武四郎は「北海道」の名づけ親でもあり、２０１８年（平成30年）は、１８６９年（明治２年）に「北海道」と命名されてから１５０年目です。

続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第11回（最終回）

■「クッチャロ」

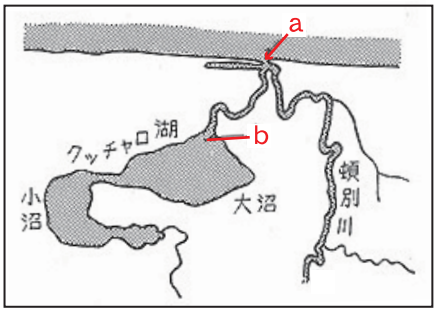
「クッチャロ」について、知里真志保博士は、もとの意味は「のどもと」「のどから胃袋へ入る入り口」で、「沼から水の流れ出る口」「沼の水が流れ出て川となるところ」と訳しています。

知里博士は、浜頓別町にあるクッチャロ湖の図で、aからbは、今はクッチャロ川と呼ばれているが、もとはこの沼のクッ（のど）であったと考えられ、bは「トー・クッチャロ」で「沼ののどもと」と説明しています。

庶路川筋の「クッチャロペッ」は、庶路川本流から渓谷へとつながる川の入り口を表したものと思います。

【参考・引用／『知里真志保著作集3』「地名アイヌ語小辞典」】

浜頓別町クッチャロ湖の図



○クッチャロペツ川

「クッチャロペツ川」は、庶路ダム湖から2キロメートルほど北上したところで庶路川から左に分かれている川です。「クッ（のど）・チャロ（口）・ペッ（川）」という意味から、白糠地名研究会は「のどのように狭くなっている口から流れ出る川のことをいう」と解釈しています。



○カカンナイ川

「カカンナイ川」は、庶路川がコイポクショコツ川とコイカタショロ川に分かれる地点から、コイカタショロ川の約6キロメートル上流にある川です。

「カ（糸）・カン（つくる）・ナィ（沢）」という意味から地名研究会は「糸をつくる沢」という訳に加え、美唄市光珠内（こうしゅない）の「カー・ウシ・ナィ（わな・ある・沢）」をもとに「カカンナイでは、木の皮をはいで糸を作り、その糸を縄にして作ったわなで獲物を手に入れた」と説明しています。

ちなみに、知里博士は『地名アイヌ語小辞典』で、「カ」には「糸」と「（シカ・テン・ツルなどを捕らえる）わな」という意味があるとしています。

